

## ケース2 スケジュール管理が苦手で、忘れ物ばかり

### ケースを読む前に

- ①あなたは今まで友達との約束や課題の提出を忘れてしまったことがありますか。普段、あなたはスケジュール管理で工夫していることはありますか。
- ②いままでに、スケジュール管理に苦労している人が身近にいましたか。また、そのような人は、大学生活や言語学習などの授業の場で、どのような困難に直面すると思いますか。
- ③あなたは自分が担当している学習者の件で、大学や教育機関から「配慮申請」を受けたことがありますか。その「配慮申請」に対して、あなたはどのように対応しましたか。
- ④時間や期限を守ることについて、日本の社会通念ではどの程度重要視されていますか。「自己管理ができない人」はどのようなイメージで捉えられているでしょうか。

発達障害の一つにADHD（注意欠如多動性障害）があります。この障がいの主な特徴として、不注意や多動性、衝動性が挙げられます。これらの特徴は、家庭教育や本人の努力とは無関係に生じるものです。さらに、不注意が原因となる物忘れによって、日常生活に支障をきたすことがあります。具体的には、友達との約束や締切を忘れる、約束の時間に遅れる、などです。

スケジュール管理に関しては、この障害を持つ人は一般的に「時間感覚に鈍いこと」があります。例えば、外出するとき、自分では「まだ余裕がある」と思って別のことを始めたり、身支度に時間がかかって自宅を出る時間を過ぎてしまい、遅刻をしてしまうことがあります。また、課題の提出がある場合には、課題があることを忘れて、課題が多すぎるとパニックを起こして、何から手を付けたらよいのかわからないままに時間が過ぎることも往々にしてあります。また、たとえ締切日を知っていても、「締切まであと〇日」という実感を掴みづらく、その結果として提出が間に合わないということも起こります。

次に紹介する事例のように、既に診断がついている学習者の場合には、大学の学生課を通じて、授業担当教員に「配慮申請」が寄せられることも増えてきました。ですが、その具体的な配慮の方法が一律的で、学習者本人の支援として十分でないこともあります。

このケースで問題になっているのは主にスケジュール管理の問題です。これは言語学習だけではなく、大学生活、ゆくゆくは社会生活でも問題になる重要な事柄です。このケースでは、学習者が学習をよりスムーズに行い、より良い大学生活を送るための支援の可能性と、その際に教師として学習者の自律を促す教育者としての葛藤について考えます。

## ケース2:時刻指定の「リマインダアプリ」の使用を希望します。

わたしは京都にある、新しい小さな私立大学の教員で、北といいます。専門は中国文学で、一般教養の中国語も教えています。わたしのクラスに出ている南さんのことを紹介します。

南さんは、わたしの所属する国際関係学科の1年生です。わたしは、1年生の彼女にとって必修である中国語の授業担当者です。南さんは、ADHD（注意欠如多動性障害）の診断を受けていて、彼女の登録した授業の各担当教員には配慮申請が出されています。

その配慮申請には診断名と「かくかくしかじかの理由で物を忘れることが多いため、課題等を課す場合は、できるだけ文字で書いて伝えてください」という依頼が書かれています（書かれていたのはこれだけです）。

そこで、南さんに、具体的にはどんなことに困っている／いたのか聞いてみました。

南さんは小学生のころから、忘れ物が多く、宿題も覚えていられなかったそうです。ただ、忘れたことに気がついたら、休憩時間中にささっと片付けていたそうです。勉強が得意だったため、小学校～中学校はそれで何とかだったそうです。診断を受けたのは高校生のときで、ADHDのことを話に聞いて、思い当たるが多かったため、診断を受けることを決めたとのことでした。

南さんは、大学では、上述の通り配慮申請をしています。しかし「課題等の連絡は文字化して伝える」がどこまで有効かを聞いてみたら、「文字化したメモを見ること自体を忘れるので、ないよりはましだけれど……」という芳しくない答えが返ってきました。つまり、記録してある媒体を見るという習慣がなければ、紙に書いてもらってもダメ、LMSでの通知もダメ、eメールによる連絡もダメ……ということらしいです。

南さん自身も対策をしていないわけではなく、課題があることに気がつくこともあるそうです。しかし、大学は授業ごとに課題が出たりするので、たくさんの課題が目の前に積み上がると、どれからやろうかと考えている……というか、パニック状態になっているうちに、時間だけがどんどん過ぎて間に合わなくなってしまうこともあるそうです。

個々の授業の課題よりも、さらに大きな問題があります。我々の学科は、2年次で全員に留学を義務づけています。そのため、1年次では、何回も何回もいろいろな書類を決められた期日までに提出しないとけません。パスポートのコピー、ビザの申請書、銀行の預金残高証明、誓約書……などなどです。しかし、南さんは、これを期日通りに提出することはおろか、提出しないとイケないということまで、忘れてしまいます。このような重要書類の提出を怠ると、我々の学科ではペナルティポイントを加算していくことになっています。このポイントが一定数に達すると、留学が許可されません。南さんが書類をきちんと出せないことは、留学の支援をする部局でも問題視されています。

「そういう手続きは、友だち同士で、『ねえ、あれ、出した?』とかおしゃべりをしているときに気がつかない?」と、わたしが尋ねると、南さんは、なるべく友だちづきあいをしないようにしていると答えました。それは、友だちとの約束なども片端から忘れてしまうため、小学校以来、たびたび人間関係が壊れることがあり、それが原因で、人と一定以上に親しくなるのを避けているのだそうです。

南さんが忘れるのは、学校関係の用事だけではないようです。日常生活の中でも、しなければならぬいろいろなことを忘れるため、リマインダアプリを使って、「帰宅するころ」「バイト先に着いたころ」を見計らって、リマインダが自分のスマホに届くようにしているそうです。

ある日、南さんから、わたしに対して次のような希望が寄せられました。

リマインダを共有するアプリがある。これを使って、授業の前日の決まった時刻に、課題を知らせるリマインダを届けてほしい。特定の個人だけに届けると、特別扱いをしているようなので、クラスの希望者全員に届けるようにしたらどうか。

わたしは、これを良いアイデアだと思いました。課題を忘れるのは、何も南さんだけではありません。こうすれば、クラス全体の課題提出率も向上するのではないかと考えました。しかし、同僚の教師にこの話をしたら、批判も出ました。曰く「他の授業でもそういう要求が出てきたらどうする?」「それは『学習者オートノミー』とは逆方向を向いているのでは?学習に成功する学習者には、自らの学習を計画し管理するメタ認知的学習方略を使える学習者が多い。そういう学習方略に習熟することを妨げるのでは?」

わたしは熟考した末、時刻指定のリマインダの利用を始めました。案の定、他の学生からも好評でした。しかし、時刻指定のリマインダだけでは、南さんの問題は完全には解決しませんでした。リマインダを見て、すぐ課題に取りかかることができれば問題はないのですが、何かの用事があって、「これが済んだらやろう」と考えて後回しにし、そのうちに忘れてしまうことも多いのだそうです。

いちばん確実なのは、「授業が終わってすぐ、学校にいる間に、課題を済ませる」であると、南さんは言います。これができるときは、問題が起こらない、と。わたしの授業は2限(昼休みの直前の時間帯)にあります。そこで、毎週、その教室を昼休みの間、借りて、希望する学生には、そこで昼食を取りながら課題を片付けることを勧めました。教師(わたし)もまた昼食をそこで取り、質問があれば受け付けるようにしました。ただし、この方法は、誰にでもできるという方法ではなく、当該の授業がたまたま昼休みの前だからできたことです。

## いろいろな声

### 南さん

小学校の時から遅刻することがよくありました。せっかく時間通りに家を出ても、忘れ物に途中で気が付いて家に取りに戻ったりして、結局遅刻してしまうのです。それでも、高校までは何とかなっていました。さすがに「何とかしなければ」と思うようになったのは、アルバイトを始めてからです。一度、バイトのシフトを間違えて無断欠勤になってしまったことがあり、店長にひどく怒られました。それから「リマインダアプリ」を活用することを始めました。これは自分でも発見でした。このアプリを使うと、「何か忘れていてのではないか」という心配が減るので、日常生活を送るのが大分楽になりました。それで、中国語の北先生にも課題提出前にアプリを使って欲しいと伝えました。授業で使うことを要望したのは、他にも課題を忘れる人がいたからです。クラス全員にリマインドが送られるのなら公平だし、課題の未提出者が少なくなれば、クラス全体にとっても良いことではありませんか?

### 北先生（南さんの大学の先生、南さんの中国語の授業を担当している）

大学から配慮申請は出ていたので、課題等の連絡は文字にして伝えた。しかし、それでも南さんに関しては課題の提出状況が良くなかった。わたしは専任教員であり、南さんとは授業以外にも、留学のことで面談をする機会がある。それで、南さんに日常生活での対応を詳しく聞いた。配慮申請での対応があまり本人の役に立っていなかったのは驚きであり、リマインダアプリの提案をされるとは、正直思っていなかった。だが、専任教員として、学習者がスムーズに学習できる環境を整えることは自分の役目であり、できるだけ支援をしたいと考えている。しかし、自分の授業だけならともかく、もし南さんが「ほか先生の授業でもリマインダアプリを使ってほしい」と要望することもあるかもしれない。同僚の先生の中には受け入れられない方もいるだろう。

そもそも、提出物の締切りを守ることは、学生の自己管理の問題だ。留学関係の書類の不備で、ペナルティポイントも大分溜まっている。しかし、南さんは優秀な学生なので、是非留学に行ってもらいたい。それで、この大学ではわたしを含めた教員や学生課の職員があれこれ気遣ってくれる。だが、留学先ではそのような面倒は見てもらえない。留学先で予定されているプログラムに遅刻したり、プログラムを忘れて参加できなければ、留学に行かせる意味がなくなるのではないかと心配だ。従って、自己管理ができるように指導する必要も教育者として感じている。できるだけ学習者をサポートしたいとは思うものの、それをどこまで行うかは判断が難しいところだ。

### 東先生（北先生の同僚、中国語の先生）

私は非常勤講師としてこの大学で中国語を教えています。南さんも私の授業を履修しています。私も大学の学生課から、南さんに対する配慮申請を受け取りました。大学が要望しているのですから、課題については文字で伝えるように努めています。逆に言えば、それ以上のことはするべきではない、と考えています。

南さんがスケジュール管理に苦勞していることは私も知っています。最初はよく遅刻をしていたのですが、私が注意したら最近では減ってきました。南さんも自分なりに工夫しているようです。これは私の考えですが、社会生活に支障がでないように訓練させるのも教育の一環です。大学では失敗から学習者本人が様々なことを学ぶのも大事ですよ。たとえ失敗しても、経験を積ませてそこから自分なりの工夫を引き出すことこそ、学習者にとっての「学び」になるのではないのでしょうか。スケジュール管理のアプリは同僚の先生方で話題になっています。学習者が個人的に使うのは良いですが、授業で使うのは抵抗を覚えます。そういうツールを使って、失敗を回避させることが本当に本人のためになるかどうか、私は疑問です。

### クラスメイトの西さん（国際関係学科1年生）

南さんと学科が同じなので、同じ授業を多く取っています。特別仲が良いというほどではありませんが、よく会うので、教室では近い席に座ります。授業の後は一緒にお昼を食べますが、週末に一緒

に出かけたりはしません。一度映画に誘ったのですが、断られました。それからつかず離れずの距離感を保っています。

南さんのことで覚えているのは、留学の説明会の時のことです。その日に提出する重要書類を忘れたというので青くなっていました。あの書類持ってこなくちゃね、って友達の間でも話題になったのに…。でも、自己責任だから仕方がないし、授業に遅刻することも多いので、はじめは勉強や留学に興味ないのかな、と思ってました。それに、大事な課題は先生が黒板やLMSに書いてくれるけど、それ以外の宿題などはすっかり忘れていて、授業中に「宿題あったっけ？」と聞かれることもありました。そういう時に、こちらから宿題を見せたこともあったんですけど、南さんは基本的に自分で何とかしているみたいです。実は南さんはかなり勉強していて、集中すると、宿題とかはすぐできちゃうんですよね。最近、特に中国語の授業が難しくなってきたので、分からないところをよく教えてもらいます。話しているうちに、すごく真面目な人なんだなって、最初の頃とは大分印象も変わりました。

### 問A. 個人レベルの問い

Q1: 南さんは、課題が出た時と課題の締切前に、どのように考えていますか？南さんの心の内を想像してみましょう。

Q2: スケジュール管理について、南さんが今までに授業でどのような対策を取ってきたと思いますか？

Q3: 2人の先生（北先生と東先生）が「配慮申請」に対してとった行動や対処は、あなたから見て妥当なものでしたか？

### 問B. 学習空間レベルの問い

Q1: あなたの授業に参加している学習者の「多様性」には、どのようなものがありますか？

Q2: 授業で課題の提出が問題になるのは、どのような時ですか？

Q3: この授業が2限目でなく、他の時限だったら、昼休みの活用以外にどんな対応が考えられますか？

Q4: 授業担当者は、学習者の要望にどこまで対応するべきだと思いますか？

Q5: この大学では、多様な学生に対応するために、配慮申請をどう改善したらよいでしょう？

Q6: 南さんのような学生でも、留学を含めたより良い大学生活を送るために、大学全体としての仕組みやサポートについて、何が必要でしょうか？

### 問C. 社会レベルの問い

Q1: 南さんは「人と一定以上に親しくなるのを避ける」と言っています。具体的にどのようなトラブルが起きたと考えられますか？そのような状況が起きるのは、ダイバーシティ、インクルージョンの観点から見て、社会的にどのような問題があるでしょう？

Q2: スケジュール管理がうまくいかない人が身近にいた場合、「自己責任」だと一方的に片づけても良いのでしょうか？「自己責任」と言われる背景には、どのようなものがあるのでしょうか？

Q3: 時間や期日を守ることは、日本社会ではどの程度重要なことでしょうか?他の国ではどのように考えられていますか?もしあなたが日本以外の国で暮らした経験がある場合、その国と日本を比較してください。

### ディスカッション

これまでの「問い」を参考に、考えてみてください。

Q1: どのような授業なら、南さんのような学習者も参加しやすいでしょうか?

Q2: 南さんを含めた多様な学習者が過ごしやすい大学はどのような場でしょうか?あなたは大学のファカルティメンバーとして、大学にどんな改善を提案しますか?

Q3: 多様な人たちが生きやすい社会はどのような社会でしょうか?あなたが所属している社会が「こうなったら良い」と思うのは、どんな社会ですか?また、その社会を実現するためには何が必要でしょうか?

### 解説

- ・教室に集まる学習者の多様性について
- ・言語学習に関する教師のビリーフ(例:メタ認知的学習方略)
- ・言語の学びに直接かかわらないが、言語学習において必要なこと(授業外での課題の遂行を忘れないなど)
- ・配慮申請や合理的配慮にどう向き合ったらよいのか?
- ・日本社会の時間感覚について